
真純くんの事情

内海 さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真純くんの事情

【Nコード】

N0156Z

【作者名】

内海 さくら

【あらすじ】

結婚を意識しながらも別れてしまった元恋人が住む街に、買収の仕事をするために戻ってきた真純。彼女の婚約を知り愕然とする中、買収相手である『はなみ花屋』の店主にある想いが芽生え始める。『私の彼は副社長』真純サイドの物語、そして、現在連載中の2nd seasonの伏線となります。初めてのお客様は、『私の彼は副社長』からお読みになられることをお勧めします。

第1話

『その駅前商店街の土地を買収してくれ。
資料は届いているだろう?』

突然の電話で新たな土地買収を告げてきたFIE社長、おんだまこと恩田真人。
彼の話聞きながら、ノートパソコンに送られてきたファイルに目を通した僕は
驚きの声を上げた。

「父さん、寂れた商店街の土地を
こんな高い値段で買収しろと言うんですか?」

『父さんじゃない、社長だ。高いが、いつものことだろう?』

「あ、はい社長。にしても…」

どの店も多額の借金ばかり、
この資料から見ると、

この商店街の真北にある駅北口エリアの方が大型商業施設もあり
集客も見込めるのに。

携帯電話を耳に挟み、不満げな表情でページを進めていると、
父の呟くような声が聞こえてきた。

『実はな、真純。もう買収を始めているんだ』

「はっ？」

その地域は、元々父の買収担当。

身体が弱い妻と娘に寂しい思いをさせるわけにはいかないと、
自宅近くの会社を拠点にあちこちと動いているのだ。

「だったら、最後まで社長がしてください」

『いや、それがなあ……真純。ロスにいい土地を見つけたんだよ』

ようやく、父の魂胆が分かった。

父はどちらかというと、地味に仕事をするのが嫌いな人だ。

テレビや雑誌に出て知名度を上げたり、

派手で豪華なスポーツクラブをデザインすることを好んだ。

そして今度は、海外進出というわけだ。

「そついうことですか」

『そういう訳だ、副社長。』

……というより、影の社長と言ったほうがいいかもな。真純』

「本当だよ」

思わず、本音が出ていた。

買収の業務の合間、普段は社長がするような業務も全てこなしている。

そのお陰で、食事や休憩時間なども取れず、移動時間にさつと済ませているのだ。

そんな多忙なスケジュールのせいで、プライベートは散々なわけで。

「年をとっても僕が結婚できなかつたら、父さんのせいだから」

『あれ、こないだまで付き合っていた彼女はどうした？』

「とつくの昔に別れたよ」

「へえ、結婚まで決めてたのに」

ふと、亜紀の顔が浮かんだ。

—— 平井亜紀 ——

結婚まで考えた元恋人。

亜紀とは大学時代、友人が企画したコンパで出会った。
大学のパンフにモデルとして起用されたこともあるひとつ年上の彼女は、

美貌頭脳ともに学内で、彼女に一目置いていた僕は
コンパを企画した友人の手を取り、飛び上がるほどに喜んだ。
もちろんコンパでは、彼女をターゲットに絞った。
さり気なくプラチナ席である彼女のサイドをとり、
談笑しながら彼女の好きな話題を探る。

ブランド品が好きで、年に一度はヨーロッパへ旅に出るという彼女の
話から、

僕の知っている限りのところで言葉を合わせてゆくと、
尊敬の眼差しで見つめられた。

その場は、周りの男たちが羨むような好感触な雰囲気だった。
ふたりの世界に入り込めないために向けられる
痛いぐらいの羨む視線を浴びながら、優越感に浸り続けた。

もちろん僕自身も、高嶺の花の彼女にあと数センチ……そういう意識
だった。

2次会に行き、ふたりきりになった時を見計らい
彼女の携帯へ僕のメルアドを登録することに成功する。
だが……。

「あなた、素敵だけど女性の扱いが上手すぎて怖いね。
付き合ったら女性関係で苦労しそうね」

なんて、まるで占い師のような言葉を投げかけられ
おまけに、このメルアドは破棄していい？とまで言われたのだ。

もちろん力チンと来た。

思わせぶりの雰囲気を作り上げ男をその気にさせながら、いきなりどん底に落とす。

付き合っても無いのに、未来の人生を決めつけようとする彼女、そんな尖った鼻をへし折りたくなった。

悪く言えばゲーム感覚にも似た気持ちだった。

「へえ。じゃ、その言葉が本当かどうか試してみないか。火傷しないくらいに付き合ってみればいいんじゃないの？」

「試す？」

「そう…例えば、気に入った服が見つかった時、君はどうする？欲しいなら手にとった後、鏡を覗いて自分に合うかどうか品定めするだろう」

「あなたを品定めしていいってこと？」

「ああ、どうぞ」

お客に物を売る時、まずは手に取らせ触れさせることが第一段階だ。品物そのものに興味を持ってもらう必要がある。

亜紀は、意外な提案に黒い瞳を大きく開け驚いているようだ。

「ずいぶん、自分に自信があるようね。そんなこと初めて言われたわ」

「そう？自分にというよりも君を大切にする自信があるだけだ」

「そういうところが、怪しいのよ。女性慣れしてるみたいで」

「失礼だな。詐欺師みたいじゃないか……まっ、いいさ。
また会ってみたくなったらメールして、待ってるから」

彼女の中に自分の存在を植えつけたら、即引かなければならない。
そこで押し過ぎたら、悪徳の訪問販売と同じになり印象は悪くなる。

暫しは焦る気持ちを抑えて彼女の連絡を待つのだ。
今後の展開が追い風となることを僕は神に祈った。

あんなに頑張ったコンパ、結局は自惚れた自分に気付かせてもらった形になった。
何ヶ月も来ないメールに、彼女とのラブゲームの終息を感じ、諦める。

その後も彼女は僕にとって憧れの人に留まり、
そうしながらも気になった女性と出会いと別れを経験した。
だが、彼女とは意外な所から進展することになった。
彼女が、ダイエットのためと僕の父が経営するスポーツクラブへ現

れたのだ。

当時バイトでインストラクターの仕事をしていた僕は専属のコーチとして、

彼女につくこととなった。

「平井…どうしてここへ？」

亜紀から渡された個人カルテに目を通し、

声が漏れそうなくらいに驚いた僕は彼女を見つめる。

ダイエットとは程遠い完璧な身体計測の値。

そして、彼女自身が僕を指名したのだと記載してあったのだ。

その理由は、僕が問う前に彼女の口から知らされることとなった。

「あれからも、あなたが気になって気になって仕方が無かったの」

その日の夜、いうまでもなく僕は彼女を食事に誘った。

懐かしい……。

彼女とは、一番長く付き合ったと思う。

あの、男に対し尖った性格も、彼女の過去のトラウマが原因だったようで、

付き合い始めてからは彼女のこざっぱりとした明るさや時折見せる猫のような甘えた仕草に嵌っていった。

大学を卒業後FIEの副社長に就任したあとも、恋人関係は続いた。一足早く世間に出ていた彼女とスケジュールを合わせ、少ない時間を密に過ごし、愛を深めてゆく。

しかし、その愛に揺らぎが出てきたのはお互いが結婚を意識し始めた頃だった。

僕の仕事は、ますます責任の多いものとなってゆき、なかなか彼女の元へ帰る事が出来ず、すれ違いの生活から互いが互いの不安を言えないまま、結局は罵りあい喧嘩となり……。

なのに……。

別れて1年も経たないうちに、彼女のいるあの街へ帰ることになるなんて、皮肉なものだった。

『真純？…おい！』

どれだけ僕は、ぼんやりしていたのだろうか？
久し振りに感傷に浸っていた気がする。

「もう、いいよ」

父にそう告げて、心に施錠した。

第2話

『まっ、モテモテの真純のことだから、
またすぐに新しい恋を見つかるだろうよ』

父の声が、遠く聞こえてくる。

今まで、いろんな恋をしてきた。

長い間寂しい思いをすることはなく、常に隣には女性がいて僕を支えてくれた。

ただ、学生の頃は恋より部活、大人になると恋より仕事を優先してしまった結果

長く育む恋愛は経験できなかった気がする。

と言っても、恋人をないがしろにした訳ではなかったのだが。

「まったく、人のことだと思って」

呆れ返りながら、再びパソコンのモニターに視線を移した。
だがその中に記載してある買収状況を見て思わず驚きの声を上げてしまったのだ。

「これって、もうほとんどが買収済みじゃないですか」

商店街の土地は、ほとんどが買収の同意を得ているものばかりで、あとは契約を残すだけとなっていた。

残っている土地は、現在も店舗として使われている3軒の土地のみ。駅前の一等地だ。

「凄いですね。だったら、残りの3件もさっさと終わらせてしまいましょう」

素人同然の経営状態、

借金もかさんでいるこの商店街の経営者たちを落とすのは簡単なことだ。

相場より高いお金をちらつかせ、

この商店街に居ても先は見えないことを懇々と話していけば、賢い人間ならば自分が望む判断を下してくれる。

『だがな、真純。そんなひと筋縄じゃないんだよ』

頭の中に浮かんできた計画を覆すかのように、社長は理由を話し出した。

どうやら頑なに買収を拒否している地主がいるようで、

残りの2件もそれに加わるように拒否し続けているとのこと。

「あ…このはなみ花屋がそうですか」

『ああ、私も詳しくは分からないから、担当したスタッフに直接聞いてみるといい。』

そっちの買収は終わったのだろうか？いつ本社に帰ってくるんだ』

「そうですね。建設会社との残りの打ち合わせはこっちの支配人に任せるとして、数日中には戻れます」

『じゃ、任せたぞ』

「はい」

『ああ、そうだ。いつも言っているが、地主に深入りするな。特別な感情を持ったらアウトだぞ』

買収に関して未熟だったとはいえ、まるで身内のような感情を持ってしまったがために、老夫婦の人生を変えてしまった過去がある。

買収の断念。

多額の借金苦による老夫婦の自殺……。

そんな心の傷がまだ癒えぬのを、父は分かっているようで、新しい土地買収を始める度にこうやって忠告してくれる。

売地の看板が脳裏に浮かぶ。

主が死に、灯が消えたように寂しくなった旅館の館内を呆然と歩く自分がみえる。

あの情景は、未だに僕を奈落の底へと突き落とす。

あれ以来、仕事に情を持ち込むことを極度に嫌った。

もう二度とあんな思いをしなくなかったからだ。

「分かってます。社長」

僕は、ファイルを閉じた。

視線を画面から宙に向け、天井を睨みつける。

もう、あの頃の自分とは違うのだ。

場数も踏んだし、買収に関してのノウハウは父よりも豊富だという自信もあった。

「任せてください」

経営向きとはお世辞でもいえないこの羽並という経営者に立ち向かうため、

僕は気合を入れた。

―― まったく、社長はどうしてこの面子を揃えたんだ――

目の前にいる買収スタッフを見つめながら、僕は呆れ返っていた。サングラスに額の剃り込み。

どこから見ても強面なふたり組みで、おまけに白いスーツときている。

そのふたりにサングラスを外させた僕は、さらに驚いた。

ふたりは、FIE東日本エリア、西日本エリア各支部の代表だったのだ。

数年前までは買収を専門に行っていた。

もちろん、僕も彼らを知っている。本当は、こんな姿など出来ない頭が切れ常識あるスタッフだと。

「随分会わない間に服のセンスが変わったようですね。

あなたたちのファッションにとにかく言いたくは無だけれど、それはどう見ても相手を脅している格好にしか見えない」

あまりにもその格好が気になってしまい、

話を中断しそんなことまで言ってしまった。

だが、彼らの答えに驚く。

「すみません、副社長……。これは社長の命令で」

「えっ！社長が」

まったく、何考えているんだと呆れてしまった。

きっと、手っ取り早く威圧して買収を成功させようと言う魂胆だったのだろう。

突拍子もないのか単純発想なのか、

時々我が父ながらその考えが分からなくなる時がある。

「わ、分かりました。今後は普通のスーツをお願いします」

「はい」

なんだか穴に入りたいくらい恥ずかしい。

僕は、咳払いをすると大人しく彼らの申し送りに耳を傾けることにした。

「……と言うことは、そのはなみ花屋の店主は買収に関して、全く聞く耳を持たないということですね」

資料を見ながら驚いたのだが、

この頑なに拒否を続けている買収相手、羽並葉子。

年は若く、病気の母の面倒を見ながら店の経営をしているという。

自分らの首を絞めるような店でも思い入れが強いようで、売らないの一点張り、

いつも門前払いなのだという。

「流れは分かりました。じゃ、後は僕が引き継ぎます。

あなたたちは、社長の指示に従ってください」

「はい」

ふたりの背中を見送った僕は、課長へ声かける。

いつも僕の気持ちを理解してくれる片腕みたいな年上男性山口だ。

「車をつけてもらえるか。商店街に行こう」

僕は、頑固者の店主、羽並葉子を見るため立ち上がる。

気持ちワクワクする。

果たして何日で落とせるか……ちょっとしたゲームだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156z/>

真純くんの事情

2011年12月2日15時48分発行